

『私はどこで生きているのか？たずねよう 真宗の教えに』

— コロナ禍に遇って —

コロナ禍のなか、頂いた時間で、感染症と人類についての本を何冊か読ませていただいた。人類と感染症との壮絶な戦いの歴史と共に、自分がいかに間違った知識で今禍に臨んでいるのかも垣間見ることができたような気がした。

広く我々の健康を損なうものを「病」^{やまい}と呼び、その代表格は、ウイルスや細菌などによる感染症と、糖尿病や高血圧、心の病などの非感染症なのだという。

感染症は、今回のコロナウイルスをはじめとしてコレラ、ハンセン病など枚挙にいとまがない。パンデミック（世界的大流行）を引き起こすような感染症は、限られた地域での病気だったものが、良きにつけ悪きにつけ人々の交流が進むにつれ、ウイルスや細菌も 国境を越えたのだという。もともとかれらには国境はないのだが。

日本でも、海外との交流によって、多くの感染症がもたらされている。

感染症は人類の歴史とともにあるという。人類は、感染症と共に生きてきたのだ。それは、ウイルスや細菌やそれを媒介する虫や動物と共に生きてきたということなのだ。

「ばい菌」とか「虫けら」と言って毛嫌いしバカにしているけれど、菌も虫も生き物であることに違いはない。かれらは、生命の歴史では私達よりはるかに長く生きつづけている。しかも人類がこの地球上で一番と思っているけれど、たとえば、個体数では虫には及ばない。それどころか、世界を数で席卷^{せっけん}しているのはかれらである。だから否が応でもかれらと共に生きていかなければならない。これからも、絶え間なく新しい生物が私達の体で生きようとしてゆくのだろう。その都度、私達は右往左往することになる。

その歴史の中で、人類がとってきた対応は、いつの時代、どの社会を見てもみな今とほとんど変わらないようだ。隔離と閉鎖、差別と排除だ。

将来のない忍従と頓挫した期待、やがて絶望にさえ慣れてしまうという極限の中で、神に仕えようとした人、正義と人間愛に生きようとした人、聖者を目指そうとした人、そんな人間像をカミュというフランスの作家は『ペスト』という著作の中で描いていた。

無実なものにさえ訪れない神の赦し、救い遂げることのできない人智、果たせぬまま死んでいかなければならない現実。確かに、それは人生の不条理を描いているように思えた。

不条理を生きなければならぬという事実を、仏教は時として悪時、場として悪世、人として濁悪邪見と示しながら、末法と教えているのだろう。その末法の世を、私達はどうか生きてゆけばよいのだろう。どうか救われていくのかということである。

金子大榮師は言われる。

「我らは現実には不安と苦悩との裡うちにあつて、それを脱のがれようとしている。知識と道徳とは、そのために用意されているのである。されど知識は身命の保持をなしうるも生死の不安を除くことはできない。そのために不安は知識とともに加わってくるのである。また道徳はいかに規定して見ても、自を善とし他を悪とする執情をどうすることもできない。そのためにいよいよ煩惱を増長し罪惡を重ねることとなるのみである。そこに自力では救われぬという事実がある。」(『歎異抄 金子大榮校注』 13 頁)(岩波文庫)

昔なら怖がらなくてもよいことを、知れば知っただけ不安をつのらせ、コロナ禍にあつては、他を責めまいと思いつつも「自分だけは」と逃げまどう事実が確かにある。

やがて歴史は語るだろう。人類は科学と良識でこのコロナ禍に打ち勝つたのだと。ところで、そこに宗教は存在したのだろうか。今は影も形も見えないではないか。

しかし、歴史は語る。度重たびなる災禍を生きた人々は多くの神や仏や菩薩を見いだしてきた。そして、最後に人々が選びとつたのは「念仏」であった。少なくとも、私たちの先祖は「念仏」で救われたのだ。だから、今、私たちの手にお念仏がある。それが、事実であることを知れば、今こそお念仏なのである。お念仏によって、我が身が照らされていく以外に救いはないのである。

多くの命を差し出して、やがて、科学と良識の勝利の日はやってくるだろう。しかし、それはまた、他の生命との共存を許さない姿でもある。それが私たちの本当の姿、自力では救われない姿なのである。だからこそ、お念仏なのである。コロナ禍に遇つて、お念仏なのである。

二〇二〇年九月二十八日

高田教区教化委員会本部員

第十二組 善立寺住職 山越 英隆